

命懸けで挑んだ床島用水

農民を助けたい庄屋の決意

今から約300年前、筑後川の北側の北野町、大刀洗町、宮ノ陣町、小郡市付近は、肥沃な土地ながら、水不足に苦しんでいました。目の前を流れる筑後川は、川幅が広く、流れも早いため、水を引くことは困難でした。川をせき止め、水路を作る計画をしても、隣接する福岡藩との紛争の種になるとして、40年もの間、計画は見送られました。筑後川から水を引くことは、農民たちの切なる願いでした。

宝永7（1710）年、大干ばつが村を襲い、飢え死にする者が続出しました。三井郡鏡村（現在の北野町金島）の高山六右衛門をはじめ5人の庄屋たちは、農民を救う決意をします。一命を投げ打つ覚悟で、工事の許しを久留米藩に要請。6代藩主・有馬則維は、これを認めました。

困難を極めた大工事

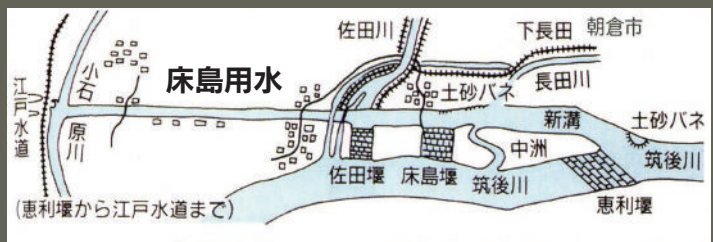
本流にある恵利堰で水をせき止め新溝に導水します。併せて、水量調整のための床島堰、佐田川との合流地点には、水量増加用の佐田堰を造りました。「床島用水」は、床島堰から小石原川の合流地点まで4300mも続きます。福岡藩の激しい抗議や妨害もあり、工事は困難を極めました。

藩から派遣された草野又六と六右衛門は、3500人を指揮します。巨大な木や石も一瞬で押し流されるだけ。失敗の連続でした。最後は、山から数十万個の大きな石や墓石を運び出し、小石は50万個の石俵にして一気に沈め完成。工事費用は銀50貫、現在の金額で6000万円もの大工事でした。
 ①文化財保護課（☎0942・309225、FAX0942・309714）

久留米歴代藩主

- 初代 豊氏 とよゆじ
 - 二代 忠頼 ただより
 - 三代 頼利 よりとし
 - 四代 頼元 よリモト
 - 五代 頼旨 よりむね
 - 六代 則維 のりふさ
 - 七代 頼僮 よりゆき
 - 八代 頼貴 よしかた
 - 九代 頼徳 よりのり
 - 十代 頼永 よりとお
 - 十一代 頼成 よしゆげ
- は今回のモノ語りと関わる藩主

▶ 恵利堰を主な堰にし、床島堰、佐田堰が完成。米の収穫高は、1.5倍に増えました



▲ 船をつなぎ一気に石を投げ入れる様子を描いた「床島堰築造絵図」。工事の心得、材木や石などの運搬の要領や器具の使い方が記されています



▲ 六右衛門を始め、工事の中心となった秋山新左衛門、鹿毛甚右衛門の地元である金島小学校では、毎年子どもたちが「とこしま堰物語」を演じています